▼現代漫画の発見▲第2弾!!

滝田ゆう作品集

9月下旬発行予定
予約受付中!!

最近わたしを夢中といってよい程、嬉しがらせてくれた作品は、滝田ゆうの「寺島町奇譚」シリーズだ……金井美恵子評

「寺島町奇譚」には、マンガの古さそのものを逆転した面白さがある……中原　佑介評

「寺島町奇譚」はもっとも正統的なユーモア・マンガの位置を占めるう……石子　順造評

滝田ゆうの全重量をかけた代表作「寺島町奇譚」ここに結晶!!

収録作品

第一話　ぎんながし　第二話　おはぐろどぶ　第三話　げんまいパンのホヤホヤ
第四話　日和下駄　第五話　エヂソンバンド　第六話　花あらしの頃
第七話　うぬぼれ鏡　第八話　萬古屋事件始末　第九話　書き下し作品

▽「玉の井今昔物語」を付す。

●九月十五日までに直接当社へ代金七二〇円(〒共)を添えてお申込みの方に限り著者サイン入り本をお送り致します。(荷造郵送は、外箱入れにし、破損無きよう完全梱包致します)

B5判・箱入上製本・三二〇頁・定価七四〇円(送料一〇〇円)

〒101
東京都千代田区神田神保町一の五五　青林堂

目安箱㊹

〝言葉の明快さについて〟

上野昂志

え・北村跌

「自分の内部からあらわれたドロドロのものに〝形式〟をあたえ、ものそのもののように堅固な存在感を明瞭に浮びあがらせることによって、自分自身からすっかり切りはなすことが、創作行為である」という大江健三郎の明快な断言は、自分の作品における言葉の形成過程についての、「文章を訂正して形をととのえ、力点を明確にし、多義性への落し罠をひとつずつ埋め、夾雑物をとりのぞき、的確な補強材を加えて、ひとつのイメージをすっきり充実させてゆく」（作家としてどのように書くか？）という認識によって裏づけられているのだろうが、そのほとんど古典的な一般論にすぎないように思われる朗らかな見解は、そのまま言葉に対しての、楽天的な、あまりにも楽天的な大江の姿勢をあらわにする。大江は、言葉をまるで粘土のようにとらえている。とするなら、作品は一個の塑像だ。大江の作品で撲られればケガをする、大江の作品をもってヘルメットをかぶれば凶器準備集合罪でパクられる……と冗談はさておき、「生れたばかりのグニャグニャした」言葉に、「意識のヤスリ」をかけることによって、「ひとつのイメージをすっきり充実させていく」ことなど、果して現在できるのか。おそらくそのようにしてはできるはずもない、そして、できはしないということを、はっきりと示しているのが近年の大江の作品ではなかったか。「ひとつのイメージを充実させて」いこうとして、逆にイメージを拡散させていくほかない言葉、その言葉自体の悪戦苦闘をあらわにしてみせたが故に、大江の文章は、ある「存在感」、非在であるほかないような存在を浮びあがらせることによって可能な「存在感」をあやうく表現しえたのではなかったか。

現在、私たちは徒労感を味あわずに言葉を発することはほとんど不可能である。情況に対する自らの内部のしこりに表現をあたえようと、ひとつの言葉をさし出しながら、いやそれによっては何事も言っていないのではないかと思いなおして次の言葉を追い求める、あるいは修飾語を積み重ねていくというシジフォス的な営為を、私たちは強いられている。悲劇的というにあまりにも滑稽な、喜劇的というにはあまりにも悲惨な、その営為に、既に辿りつくべき実質はなく、ただ次々ところがっていく言葉のアクションだけが読む者の視線をうつにすぎないというような事態。そして、その必死の努力の裏側に何くわぬ顔をして次のような言葉が差し出される。

前略
貴君の研究室に留守中、学生がしばしば出入りしてますが、生物学教室では学部学生に鍵を貸さないことになっていますので、このようなことはないようにして下さい。　草々

これだけをとりだしてここにおいてみても別にどうってことのない手紙だが、これが、東大の生物学研究室の主任教授から助手共闘の一人に宛てたものだということがわかると（最首悟『自己否定のあとに来るもの』朝日ジャーナル6・15）、その意味ははっきりしてくる。何気ない調子で書かれたこの文章は、まさにその何気なさの故に政治的な言葉となるのである。それは確かに、最首が指適しているように、学生が今後部屋に入れば機動隊が排除するであろうということ、しかもその責任

はおまえにあるぞということを通告する文書としての意味をもつと同時に、生物学教室は「事もなし」という意識をはっきりと示した文章であるが、より強く目をうつのは、その表現としての日常性である。「留守中」という言葉、その「留守」なるものがどのようなものか百も承知のくせに、実質をあらわす言葉を避けて、あえて「留守」というような日常的なニュアンスの強い言葉を選んでいるところに、この文章の内実がある。ここには封鎖もなければ占拠もなく、ましてや闘争もない、あるのは研究室だけ、ただちょっと問題なのはそこの責任者が「留守」で、「学生が出入りする」ことだとする、そのオモテの意味こそ、手紙を書いたものの意図にほかならない。何気ない言葉は、どのような現実をも何気ないものとして表現してしまうが、そこにおいては、現実をおいかくすことに主眼があるのではなく、何でもないこととして眺めさせることに目的があるのだ。日常的な言葉のもつ惰性は、意識の日常性に狙いをつける、そこでは現実などは問題でなく、ただそれをとらえる視線だけが問題となる。

ここでは、創世紀のように、事物は言葉によってのみその輪郭を闇の中から浮びあがらせるのである。たとえば、新宿駅西口地下広場について語った淀橋署長の言葉「はっきり都道なのでいままでの土曜日の夜の混雑は道路交通法で対処してきた」は、それをはっきりと示している。「土曜日の夜の混雑」というさり気ない言い方は、道路が混み合ったという何でもないことを告げるのにふさわしいだろうが、この言葉によって現実が切りとられた瞬間、集会もデモも全て闇の中に没し去ってしまう。そして、それこそがこの言葉の狙いにほかならないが、この簡明卒直な言葉のありようを支えているのが権力であることは今更いうまでもない。名付けようのないものは存在しないという白昼の論理、「通路」という名称は、即機能であり、又機能以外ではあり得ない。名称がそのまま存在であるというようなことは神話においてしかない、言葉とは本来そういうものではなかったはずだ、にもかかわらず、ここではそのあり得べからざることが可能なのだ、否、強いられているのである。「つーろ」と発音した瞬間、人は歩いて、しかも歩きつづけていなければならないという童話にも似た明快さ、そして童話と同じようにその明快さ故の不気味さは、機動隊のあからさまな出動によってしか保障されはしない、あたかもタブーによってのみ童話がその世界を支えているのと同様に。

私たちの言葉に屈折を強いるのが、この権力の言葉の明快さであることは自明の事だが、しかし問題は「通路」に「広場」を対置させることではない、明快な空間を不断に名づけようもない空間に解放することにあるのだ。そして、この場合の空間とは現実の空間に限らないことも又自明である。

日本忍法伝　第三部

新・日本書紀

第12回

作・佐々木守
え・岡本颯子

第六章
騎馬奔る革命の歴史
（その1）

（一）

不知火の海に潮が満ちる。
潮は沖の方からざわめいて満ちる。
月は西に沈み、潮は南からくる。
波頭は白くうねり、小ぎざみにふるえる。
月はまた西にかたむく。
潮が満ちる。

その夜、豊媛の国家は、不知火の海の潮の如く、暗いうちから、ざわめいていた。

まだ姿を見せぬ日輪を待って、東の空に向かい、祈りをささげる人々の姿があちこちに見られた。

潮が満つ。
不知火の海に潮が満つ。

豊媛は、自分の胎内にも徐々に潮がおしよせ、満ちてくるのを感じる。

それは腹壁にはげしい衝撃となってつたわってくる。

不知火の海に潮が満つ。

その潮の流れと共に、豊媛を襲う間歇的な痛みは、少しずつその時間をちぢめる。

イズモよ、さあ、私のイズモよ、よみがえれ！　お前のたくましいいのちの力で、私の胎内を力一杯蹴りつけて、この邪馬台の国によみがえれ！

邪馬台国の日輪・豊媛は十五歳。

痛い！　何という痛み！　しかし、私は耐える。いや、この痛みすら今はこころよい。だって私のイズモ、お前が私の前に、はじめて姿を見せてくれるんだもの。

産屋は、宮殿の裏の丘にたてられた。

産屋は、丘の小川の上にたてられた。

小川は、しかし水清く、丘の斜面を勢いよく流れ下って、一気に不知火の海にそそいでいる。

その産屋で、豊媛は真白い裸身を、女たちの前にさらして、低い梁に両手をまきつけ、まるで背のびするように立っていた。いや実はぶら下がっていたといった方がいいかもしれない。

両肢は、美夜日と、もう一人の女によってしっかりと広く開げられていた。

陣痛が走るたび、豊媛の身体はうねり、くいしばった歯の間からうめ

きがもれた。そして、腹壁は微妙に蠕動をくりかえす。

玉依彦よ、あなたの生命が今よみがえります。あなたが、私の身体をとおって、いま新しいいのちとして生きかえろうとしているのです。

おお、玉依彦、私は、たった今、ほんとうに心の底からお前を愛している。あなたも愛の証しを私に……、又、激痛が襲う。そうだったのですか、この痛みが、あなたの私に対する愛の証しなのですか。

股間をするすると、羊水がつたって流れる。

ああ、玉依彦よ、あの鐸の音が、あなたの、あなたのイズモの銅鐸の音が、まるで耳をつんざくように、私のすぐ耳元で鳴りひびいています。

おお！　イズモ！　私の出雲！

潮は満ちる！

銅鐸のうなりが、私の耳の中で！

玉依彦！　玉依彦！

次の瞬間！　豊媛は、みずからの足元で、はげしく泣きさけぶ嬰児の声をきいていた。

「おめでとうございます。日輪！」

美夜日が叫ぶようにいった。

「元気な女の御子でございます！」

ああ、私は、二人目の日輪を、たった今産んだ！

豊媛は十五歳！

（二）

はしけやし
髪に挿せ
わが児
椀に盛れ
この児
紫野の
陽炎にかざせ
はしけやし
汝が呉れしわが児

美夜日たちが、嬰児を沐浴させながらうたう声が聞こえてくる。

その声を聞きながら、豊媛は何故か微笑んでいる。その微笑みは今まで経験したこともないくらい満ちたりた心から自然に生まれてくるもののようであった。

いまの豊媛にとって、不思議なくらい、玉依彦の思い出はうすれている。おそらく、その思い出は、いま沐浴をうけながら、元気に泣いている嬰児の中に、静かに溶けこんでいってしまったようだった。

が、その想いは、一瞬、背後を襲った奇妙なねとつくような感覚に破られる。

速瀬彦だ。

速瀬彦が、今日もどこからか、私をうかがっているのだ。

あの欲望にぎらつく瞳で、じっと、どこからか、私をうかがっている。

さようなら、速瀬彦！　可哀そうだけれども、もうあなたのつとめは終わったのです。

子どもが産まれたあくる日、奈美彦が速瀬彦に向かって宣言したではないか。「日輪は美事に後継者を産んだ。従って速瀬彦、もうお前のオトコとしてのつとめは終わったのだ！」と。

そう、邪馬台国の日輪は、生涯ただ一人のオトコと交わり、そして、一人だけ後継者たらんとする子どもを産むのだ。

さようなら、速瀬彦、あなたの哀れなつとめはもう終わったのです。

しかし、豊媛は、十五歳。これから先、ずっとひとりで生きていくことの淋しさにまだ気づいてはいない。あと、老いさらばえて死ぬる日まで、男の肌には指もふれずに生きなければならないという、邪馬台国の日輪の運命のもつ、もう一つの残酷さに気づいてはいない。今はただ、あの速瀬彦の蛇のような肌からのがれることのできた喜びにだけひたっている。

いや、それよりもなによりも、目の前にあるかたちとしてのイズモをみつめ、抱きしめる喜びに、他のことはすべて忘れていた。

美夜日が、沐浴を終えた嬰児を抱いてくる。

「おお、私のイズモ！」

口に出してはいえないことばを、心の底深くのみこんで、豊媛はつややかな嬰児の頬をそっと指で押してみる。はねかえってくるような弾力！　幼い生命が満ちあふれている。

私のイズモ！　眠っていないで、さあ、そのつぶらなひとみをあけて、私をみてちょうだい！　私が、あなたの母よ、私が、あなたの大地よ！

もう一度、日輪は、そっと嬰児の頬を撫でてみる。

と、その時だった。
はるか、不知火の怒濤うちよせる海岸の方から、その波のひびきにまじって、トキの声が聞こえて来たのは！
同時に、洞木をはげしく叩く音がしたかと思うと、おそろしい勢いで奈美彦がかけこんで来た！
「日輪！　狗奴国の奴らが！」
「何といった、奈美彦」
豊媛にかわって美夜日がといかえした。
「狗奴国の奴らが攻めて来ました。畜生！　この一、二年、新しい日輪の力におそれをなして沈黙を守っていた狗奴国の奴らめが！」
「日輪！」
くるりと向きなおると美夜日が、豊媛に叫んだ。
「すぐにお出まし下さい。邪馬台の人々を勇気づけるために！　邪馬台の戦士をはげますために……」
一瞬、豊媛は立ちすくむ。
忘れていた血なまぐさい記憶が一気によみがえった。
「参りましょう」
豊媛はうなずく。まっておくれ、私のイズモ、私は、お前の可愛いい眠りをさまそうとする連中を、とりしずめに行って来ます。すぐ帰って来ます。だから、それまで、目をさまさずに、ゆっくり眠っているのよ。

（三）

矢がとびかい、弓がうなり、矛がたけり、槍が血に光った。
すでに海岸には、十数人の屍体がころがり、それでも、おしよせる狗奴国の男たちと邪馬台の男たちは勇敢に闘っていた。
末盧国、伊都国、奴国、不弥国、投馬国をはじめとして、かつては百余の国にわかれ闘っていた小国は、

第一代日輪・卑弥呼の時代にそのほとんどが統一され邪馬台国の支配下にあった。しかし、その邪馬台国からさらに北にあった狗奴国だけは、逆に邪馬台国にはしたがわず、狗奴国以北の多くの国々を支配下におさめ、邪馬台国に匹敵する勢力として相対していたのであった。
その狗奴国も、女王卑弥呼による第一次の邪馬台国連合の成立、そして豊媛による第二次の邪馬台国連合の成立に際し、何故か不気味な沈黙を守っていた。
何人かの志能便（忍び）も、あくことなく狗奴国にはなたれた。しかし、狗奴国内部に何か得体の知れぬ政変があったようだという報告がもたらされるきりで、その政変の実体については何一つ知らされることがなかったのだ。
その狗奴国が、何十年の沈黙を破って、とつぜん攻めよせて来たということは、その何らかの政変がようやくおちつき、新たなる狗奴国連合のいしずえが築かれた証拠とみてよいのだろうか。
「日輪だ！　日輪が来たぞ！」

豊媛が、白いもすそをひるがえして戦いの庭に立つと、邪馬台国の戦士たちの間に、熱っぽいささやきが流れた。

鏡は、その日も豊媛のすぐ横にあった。そして太陽をうけて、それはキラリ、キラリとまばゆい光を狗奴国の戦士めがけてなげつけていた。

「わが日輪のため！　邪馬台の戦士よ、一歩もひくな！」

奈美彦が叫んだ。

わあーっと邪馬台の男たちは、勇気をふるいおこして、かけはじめる。

その時だ！　狗奴国の男たちの中に声があった。

「ひるむな、狗奴国の男たち！　邪馬台の日輪、何ぞおそるることやある！　聞け！　その日輪は過日子を産んだのだ！　わかるか！　日輪といえど、我らと同じ人間！　男も抱けば、子も産む！　おそるるな、狗奴国の勇敢な男たちよ！

「おお、狗古智彦！」

奈美彦がうめいた。

「奈美彦、あの男は」

「はっ、狗奴国の男王、狗古智彦にございます」

豊媛は、はるか砂煙と、陽炎のかなたに絶叫する男をにらんだ。

狗古智彦は、その鼻下から頬、あごにかけてみごとなまっ黒なひげをたくわえている。その肌は赤銅色に輝き、血を浴びて光ってみえた。

狗古智彦の声と共に、狗奴国の男たちは、ときの声をあげて邪馬台国の男たちに迫った。

「日輪何するものぞ！」

「日輪とて普通の女！」

「日輪とて男も抱けば子も産むというぞ！」

口々に叫びつつ、狗奴国の男たちは迫る。

「日輪よ！　鏡を！　鏡を！」

豊媛は、急いで鏡をまわす。

きらり、きらり、するどい光線の反射は、狗奴国の男たちの胆をひやすが如く、邪馬台国の男たちを勇気づける如く、ひらめいた。

「ワッハッハッハッハ」

狗古智彦の破れ鐘のような声がひびいた。

「鏡如きにおそれるな！　そんなものはわが狗奴国には、海へ捨てるほどあるわ！」

瞬間、狗古智彦のまわりの男たちは、さっとかくしもっていた鏡を太陽に向けてかざした。

「おおっ、日輪が奴らにも！」

みよ！　十いくつの鏡が、くっきりと太陽をとらえて、邪馬台国の男たちの目を射ているではないか。

「それ！　すすめ！」

一気にけちらせと狗奴国の男たちは迫った。

「奈美彦、狗奴国にも日輪が……」

豊媛は思わず叫んだ。

「やむをえません。こうなれば、最後の手段です」

奈美彦は、そばの男に目くばせした。

その男はうなずくと、静かに、まいていた布をひろげた。

それは土色をした、大きな「のぼり」であった。
その「のぼり」を一きわ高くかかげて奈美彦はどなった。
「やあ！　狗奴国の狗古智彦、この旗が見えるか！」
その声に、一瞬戦場はしんとしずまりかえった。
「この旗こそ、すぐる時、大魏国の王よりたまわりたる黄幢なるぞ。魏国王はすでに、わが日輪に対し、親魏倭王の称号をたまわっている。狗古智彦、汝は、魏国に対して刃をとぎ、弓をひくか！」
へんぽんとひるがえる黄幢の前に、しばらくは敵も味方も声がなかった。
おお！　魏国！
海をへだてること何百里。まだみたこともない大陸に、魏という大国のあることは豊媛も知っていた。思えば、日輪の象徴であった「鏡」もその魏国から伝わったものではなかったか。魏国、それは如何なる国か。豊媛にとって、巨大で、つねに行方に立ちふさがる影であったあの女王・卑弥呼までが、使いを出して臣下の礼をとったという魏という国は、果たしてどのような国なのか。みよ、日輪の力にもおどろかなかった狗奴国の男たちが、たった一本の旗におそれをなして、いま、ふるえつつ狗古智彦のまわりへひき上げつつあるではないか。ああ、大魏国！　汝は如何なる国か！
「退け！　退け！　狗古智彦！　わが邪馬台国の日輪の後には大魏国あり！　退け！　狗古智彦！」
叫ぶやいなや、奈美彦は、速瀬彦にその黄幢を渡した。
「速瀬彦、さ、これをもって奴らをけちらせ！」
「しかし、おれは……」
速瀬彦は、血走った眼で豊媛をにらんだ。
「たわけ！　空しい望みに身を灼くな！　それより、その精力を、狗奴国の奴らをけちらすことに使え！」
瞬間、速瀬彦は、黄幢をひったくるようにとると、「つづけ！」と叫ぶやいなやかけ出した。
どどっとときの声を上げて邪馬台国の男たちは、速瀬彦につづいてかけ出す。
海岸の砂を、背よりも高くけ上げながら、邪馬台国の男たちは、狗奴国勢めがけて、破竹の勢いで追撃戦にうつった。
散をみだして狗奴国勢は退却にうつる。
と、その時だ！
豊媛は聞いたこともない、まろい、すばやい音が、大地をとどろかせて近づくのを耳にした。
と思う間もなく、にげまどう狗奴国勢の後から、いきなり、奇妙な男がとび出して来た。槍をかかえたその男は、脚と耳の長い、そしておどろくほど速く走るけものにうちまたがっていたのである。
そのけものの首には、長いたてがみがはえていて、おどろくほどの速さで走る長い脚の動きに、まるで逆立つようになびいていた。男は、けものの首から口へつながる綱をしっかりと片手ににぎって、その綱でけものを右に左に、自由にあやつっているもののようであった。
「奈美彦、あのけものは何じゃ！」
豊媛はきいた。
人の走る早さの何倍もの速さで走るそのけものは、四本の脚を、時には交互に走らせ、時には前肢と後肢を共にあわせて、とぶように走る。
「馬じゃ」
「なに、何と申した」
「馬じゃ、騎馬じゃ！」
奈美彦が叫んだ。
「ウマ！」
ああ、何ということだろう。あの脚の早いけものは、また、その脚の力も強いとみえて速瀬彦につき従う邪馬台国の男たちを蹴ちらし、なぎたおしている。蹴ちらされた男たちは、砂に顔をうずめ、二度と起き上がってはこないのだ。何という脚力！　しかもなお、おお、何という速さ！　そしてのっている男のみごとなうでさばき！　馬というけものはまるでその男のからだの一部であるかのようにその男の意のままに動きまわっている。
「速瀬彦にげろ！」
奈美彦が叫んだ！
その声と同時だった！
馬上の男の槍が、はげしく速瀬彦のもつ黄幢の棹をうったのは！
ポキリと棹は折れ！　のぼりが倒れた。

「あはははは」
馬上の男は、笑った。
そして叫んだ。
「大魏国、滅びたり！」
馬はくるりとこちらに背を向け、
そして男をのせたまま、あっという
間に狗奴国勢の中に姿を没すると、
それを合図のように狗古智彦を中心
に狗奴国の男たちは、潮がひくよう
にひき上げていった。
「ウマ……」
豊媛はつぶやいた。今見た、みご
な脚とたてがみを持つ動物の登場
は、豊媛にとってかつて玉依彦に聞
かされた出雲の話以上に大きなおど
ろきとなった。
「ウマ……騎馬！」
豊媛ばかりではなかった。奈美彦
も、速瀬彦も、いや邪馬台国の男た
ちすべてが、茫然と音もなく立ちす
くんでいた。
もし、あの騎馬が、一頭ではなく、
群れを為して襲って来たら……、そ
れは考えるだに戦慄すべき光景であ
った。
「日輪よ」
ふるえ声で、低く奈美彦はつぶや
いた。
「われらが日輪よ、あの騎馬に勝
てる道はただ一つ、今度は、あなた
御自身が、亡き卑弥呼様にかわって、
大魏国王に救いを求められることじ
ゃ」

（四）

時に、海をへだてた大陸は、天下
麻の如く乱れていた。すなわち、漢
の高祖が天下を統一し、長安に都し
て四〇〇年、光武帝の中興より二〇
〇年、ようやく勢力おとろえた漢帝
国は、黄巾の乱と呼ぶ農民軍の反乱
に端を発してもろくも崩壊、世にい
う雄割拠の時代となっていた。そ
の中でも、曹操の魏、孫権の呉、劉
備玄徳の蜀が、それぞれ力をえて、
やがて三国時代となる。蜀の諸葛孔
明、張飛、関羽などの智将、勇将が
活躍した「三国志」の世界は、ちょ
うどわが国では卑弥呼の時代にあた
る。
ここでいわれている「大魏国」と
は、いうまでもなく曹操のひらいた
「魏」のことである。魏の建国は西
歴二二〇年。三国中一番勢力の強か
った魏は、やがてその手を朝鮮半島
にまでのばし、そこから、海をへだ
てた倭国とも交流があったのである。
年表風にかけば大陸の歴史は次のよ
うになる。

二二〇年　魏の建国
二二一年　劉備、蜀の皇帝となる
二二二年　呉の建国
二二三年　劉備、死す
二二八年　諸葛孔明、魏を討つ
二三〇年　魏軍、蜀に侵入
二三四年　孔明、五丈原に死す
二三九年　卑弥呼、親魏倭王に封
　　　　　ぜらる

だが、豊媛が邪馬台国の日輪とな
った二五〇年代になると、この大陸
における英雄時代も終わりをつげて
いた。蜀の滅亡、呉の崩壊、魏の内
乱――そうした激動する動きに、一
そうの拍車をかけたのは、北方ユー
ラシア森林地帯、及び内陸ユーラシ
ア乾燥地帯にかけてとつぜん、勃興
した遊牧騎馬民族国家の出現であっ
た。

（つづく）